

心やみみち

……被災地支援情報……

第91号 発行日 2008.12.1
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

あの日からもうすぐ14年、今思う、今わかる・・



岩手・宮城内陸地震
上：栗駒地区に事務所開設
中：自然豊かな風景
下：多くの山崩れが発生

この時期になると、どうしてもせわしくなる。”師走”という由縁に関係するのだろうか？私は師ではないので、走る必要もないが、何故だか世の中知らないうちに走らされているようにも思う。大阪大学総長鷺田清一さんの著書『待つということ』（角川選書）を読むと、待つということの奥深い哲学の世界に触れることができる。

さて、年が明けて1月17日を迎えると、阪神・淡路大震災から14年となる。個人的な感覚からしても、私自身も阪神・淡路大震災から10年まで走り続けてきたような気がするが、10年目を過ぎて、かなり意識的にブレーキをかけてきた。以前もどこかで触れたが、それには理由があった。それは10年目の「1・17」を迎えたときに、新聞報道などを見ていて「ハッ！」としたことがあったからだ。当たり前かもしれないが、10年経過してまだまだ知らない出来事が被災地内に多いことと痛感したのである。以来、今度はできるだけ一つひとつ丁寧に、向き合いながら、ゆっくりと歩こうと心構えを新たにして今日まで来た。あれから4年、走ってきたという感覚はない。ゆっくり歩んできたつもりだ。

しかし、今年になっていろいろな“場”で「いまやから言える」的な内容の発言を聞くことがある。一見これは、「えっ！今頃言うなよ！」と思うときもあるが、でも「これって大事なことだよな」と思える

ことも多い。特にこれから災害を経験するかも知れない地域の人たちには、こういうことこそ正確に伝えなければならないのではないかと強く思う。これからが、またKOBEの役割だ。

関連のこと、人と防災未来センター研究部から発行された『平成19年度中核的研究プロジェクト報告書－災害対応の10の要諦－』に触れておきたい。これは文字通り、これまでの人と防災未来センターでの研究や研修の結果から災害対応における課題を整理したものである。これを読んで思ったことは、率直に今の危機感を表した報告書になっているなあということである。特に、災害時に災害対策本部を設置して、悪戦苦闘が予測される自治体に対して、「もっとしっかりして下さいよ！」という叫びに近いようなメッセージであると受け取ったほど、思い切って書かれてある。

この報告書のことを、私の講演などで触れると、自治体の担当者などには関心が高まり、講演が終わった後に必ず、「その報告書はどうすれば手に入りますか？」という質問がくる。阪神・淡路大震災から14年、確実に危機意識は高まっている。これを弾みにして、日頃の地域づくりに活かせればいいのにな、と思う。これが「事前復興」と言えるのではないか。

代表 村井 雅清



2008年度 被災地NGO協働センター 総会報告

2007年度事業報告

○寺子屋事業

震災がつなぐ全国ネットワークの委託として移動寺子屋を企画、当センターで開催しました。

2007年12月1日「もう一つの社会へ～武庫川流域委員会の取り組みから学ぶ」

講師：松本 誠（市民まちづくり研究所所長/武庫川流域委員会委員長）

○災害救援事業

KOBEや地元の大学生などによる「中越・K O B E 足湯隊」を事務局として支援しました。2007年度の派遣は能登半島地震に9回、中越沖地震が6回になります。

また、「震災がつなぐ全国ネットワーク」から、能登を忘れないために写真集、「いとしの能登 よみがえれ！～ボランティアの能登ノート」を発刊しました。

○まけないぞう事業

「まけないぞう」が生まれてから12年が経ちました。昨年度も国内外の被災地に1200頭のまけないぞうを届けました。また能登地震の被災地穴水町、輪島・山岸の被災地においてまけないぞう作りの講習会が行われたことが今後の展開として期待されます。

○提言・ネットワーク事業

震災後一貫して追及してきた「市民主体の市民社会の形成」を目指して、多様なネットワークを活用し様々な場で発信を続けています。昨年度は特に被災者のつぶやき（=生の声）の分析の必要性を発信しました。

2008年度事業計画

○寺子屋事業

今年度は、災害からの再建過程においての重要なテーマの中から当センターならではのテーマを選択し寺子屋を開催したいと考えています。

○まけないぞう事業

被災者自身が制作し、ボランティアを介して、他の被災地につながるというメディアとしての役割、被災地の再建に欠かせないコミュニティ作りとしての役割を大切に事業を継続していきます。

○災害救援事業

本年度はセンターからのスタッフの派遣も考えており、既にスタッフを「くりこま応援の会」に派遣しました。また国内における新たな災害支援活動を行う「チャリティプラットフォーム」へのアドバイスなどを通じて災害後の応急対応にとどまらず「日頃の備え」の重要性を発信していきます。

○提言・ネットワーク事業

2008年7月に被災地能登で「災害ボランティア支援友の会」が生まれました。被災僧侶たちが中心になって超宗派で発足させたこの会を当センターとしてお手伝いしていきます。

神戸の事務所で集めています！

被災地NGO協働センターでは、以下のようなものを集めています。活動の補助として使わせて頂いておりますので、お手持ちで使っていないものがありましたら、ご協力下さいようお願いします。

○テレホンカード（未使用のもの）

家や職場で眠っているテレホンカードはありませんか？最近では携帯電話の普及で出番が少なくなつた、という方も多いかもしれません。当センターでは、こうしたテレホンカードを集めて、出張時の通話や一般回線の通話料の支払いなど、電話代の補助として利用させていただいています。集めているのは未使用のものです。

○未使用ハガキ・書き損じハガキ

みなさまのお宅では、使わなかつたハガキや書き損じのハガキはどうなさっているでしょう？こうしたハガキは郵便局で手数料を支払えば交換してもらえるのです。年賀状の余りなどございましたら、お送り下さい。

○「一本のタオル運動」

今でも電話でお問い合わせを頂きますが、以前から呼びかけている「一本のタオル運動」、現在も継続しております。集めているのは新品の浴用タオルで「まけないぞう」の材料となります。一部は災害救援時の資材としても還元しています。

被災させはいま？～全国の協働を見る～

業務スタッフ 尾澤良平

■ 08年岩手・宮城内陸地震

今年の6月14日、午前8時43分、岩手県南部の山中を震源とする、マグニチュード7.2の地震が起きました。山は崩れ、道路は遮断され、孤立した多くの被災者がヘリで避難所に運ばれる事態となりました。被害は死者13名・行方不明10名・全壊33棟(11月17日消防庁調べ)と、数字だけを見れば小規模災害と捉えてしまいそうです。しかし、災害は個別具体的であることを忘れてはいけません。メディアや一般市民の関心が薄れている中、いまだに仮設住宅で暮らしながら、仕事を探し、そして帰宅への希望を持続している被災者がいます。中心的な生業が観光業、農業であったので、避難指示が出ている地域に住んでいた方の多くが、失業・収入ゼロの状態で不安な日々を送っています。

■くりこま応援の会発足！

震災がつなぐ全国ネットワークに所属しているハートネットふくしまと、とちぎボランティアネットワークは共同で被災地の復興支援活動を行うため

の事務所を発足させました。主な支援対象はくりこま耕英地区の住民(実質世帯数約40世帯)です。現在、週に5日、朝から夕方までの一時帰宅が認められています。当初、行政のボランティアに対する規制が大変厳しく、応援の会としても、住民の親戚(スタッフの一人は実際そうです)・知り合いで、許可証の申請をしていました。現場では主に、家屋の片付けや農作業のお手伝いなどをしました。また住民が早期復興のために主体に販売している、「山に力エル！」ステッカーや特産のイワナの炭焼き、これらを各イベントで売る際のお手伝いもしました。そして、各種ボランティア団体や大学、メディアとの情報共有の場作りとして活動をしてきました。複雑な状況、さまざまな規制などに行動を縛られながらも、慎重に活動を進めてきたおかげで、住民・行政の理解も少しづつ得ることが出来ました。

■風雪とともに,,,

耕英地区は戦後開かれた開拓地であって、当時の入植した1世(現60

歳以上)は、厳しい環境を根気強く開拓し、耕英の豊かな生活の基礎を作り上げました。彼らの子どもが、開拓2世(現40歳以上)と呼ばれ、1世の作った畠やイワナの養殖場などを引き継ぎ、現在中心的な存在となっている人たちです。そして若者と呼ばれる3世が耕英で育ち、1世2世の方と一緒に暮らしています。このように耕英の人々は、短い歴史とは裏腹に、故郷に大きな愛着を持ち、豊かな自然と共に生きていることを誇りを持っています。

■冬の到来、これからどうする？

耕英の方たちの復興とはまさしく「山に力エル！」ことを意味するのです。避難指示が出ている今、確かに生活は厳しいものです。しかし、彼らが耕英への想いを忘れることはありません。雪の多い冬は元々収入が少ないので、今年の冬をどのように乗り切れるか、その辺りの支援を今後どのようにしていくか。これがこれからの応援の会の考えるべき課題となっています。

被災僧侶が立ち上がった!!

災害ボランティア支援友の会発足

今年3月に発生した能登半島の被災地の僧侶の有志のみなさんが、7月「災害ボランティア支援友の会」を立ち上げられました。寺院や仏像などご自身も大きな被害を受けたにもかかわらず「災害ボランティアを支援しよう！」という趣旨であるようです。この友の会を当センターとしてお手伝いさせていただくことになりました。

被災地で被災した僧侶たちが宗派を越えかつ明確にこのような趣旨の友の会を立ち上げられたことは初めてではないかと思われます。僧侶が「ボランティア活動に菩薩道を見た」と感動されたという話はよく耳にしてきましたが、今後の活動によって、さらにお互いが学び合う、支え合うことを通じて新たな気づきを得るのではないかと考えています。活動の柱としているのは以下の4つです。

友の会のあり方

国内外の災害救援をしているボランティア団体を対象として、様々な支援に取り組みます。

・情報発信

災害時におけるボランティアの活動を収集、発信します。

・ボランティアに寄り添う

次代のボランティア育成のために協力します。

・地域に寄り添う

ボランティア支援を通じて災害復興途上での地域再生のために「場と機会」を提供します。

・被災者に寄り添う

ボランティアへの支援を通じて、災害被災地の復興・被災者の生活支援、自立、心のケアを応援します。

入会ならびにご寄付のお願い

○本会の趣旨にご賛同下さる方は事務局運営費として会費、または運営基金として協力金をご納入下さい。会員として登録させて頂きます。国内外で活躍するボランティア団体への寄付は直接ご支援か、本会事務局に御一任される場合は下記まで振り込みください。

・会費 年間一口2,000円

・振込み先 郵便振替

口座名 災害ボランティア支援友の会

口座番号 00770-4-57778

(通信欄に「ボランティア支援金」、「会員」、「運営協力費」のいずれかを明記してください)

・事務局 〒927-2151

石川県輪島市門前町走出6-66-1

興禪寺内(市堀)

・TEL:0768-42-3066

第43号

2008.12.1



発行所：被災NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel: 078-511-8698 fax: 078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngo/

ぞう通信。

いつもあなたの

おばいいます ...

みなさんお久しぶりです。半年ぶりのぞう通信となりました。発行が遅れ、申し訳ございません。さて、めっきり冬めいてきましたが、いかがお過ごしでしょうか？今年ももう少しで終わります。この1年は四川地震やミャンマーサイクロン、集中豪雨など、多くの自然災害が発生しました。早期復興を願うばかりです。急になんですが、この自然災害という言葉、実におもしろいですね。「自然」状態が「災害」状態であることなんて、おかしな話です。自然とはそうあって然りだから自然なんです。自然の反意語は人工です。災害を災害たらしめている理由の1つには、自然の人工化という側面があります。開発された山、コンクリートに固められた川、密集した都市。「然るべきでない動きによって然るべきものが壊された！」と声を荒げるのが人間です。これはちょっと的を射た発言ではありませんね。

ここからはいい話。他者と距離を置いていた若者が災害後に、新しい人間関係の中で暮らしていくようになった。孤独な生活を送っていたおじいちゃんが復興活動に関わるうちに、自分のコミュニティによく顔を出すようになった。このような話は多く耳にします。現代社会は市場経済システムや個人・自由主義を導入することで成り立っています。全体として経済的豊かさが増したことは確かですが、その流れに取り残されつつある方がいることも忘れてはいけません。そんな人々が災害をきっかけとして、人間らしい自然な生活・状態に戻れたというのです。

KOBEの“まけないぞう”はある意味で復興のシンボルとして活躍しています。今回の「がんばるべあ～」が経済的支援活動のための道具だけでなく、復興のシンボルとなるかはまだわかりません。たった1枚のタオルが、災害によって、より多くの笑顔を生み出すものになることを期待したいです。「災害の被害の一部はもしかしたら不自然なものだったかもね。」いつかこんな余裕のある考え方を持てるくらいに復興してほしいです。

ややこしい話すみません。今回問い合わせたかったのはたった一つ。右上の写真の笑顔は、人工？自然？この答えだけです。ちなみに「がんばるべあ」は人工物です(笑)



「がんばるべあ～」
作成に励む
被災者の方々

「がんばるべあ～」はこうしてできた！！

6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震の被災地となった栗原市。長引く復興過程の中で、被災された方々に疲れが見え始めたころ、地元のボランティア連絡協議会が緊急集会を開き今後の支援について意見交換をしました。その際に「『一人じゃないよ、同じ被災者同士皆で力を合わせて頑張ろう』と地域みんなが応援する気持ちや、元気付けらるようなメッセージを届けたい」という意見が出されました。そこで阪神・淡路大震災の時に、このような想いを届けるメッセージとなった「まけないぞう」を紹介しました。栗原市では、「頑張っていこう！」を「がんばるべあ～」というそうです。そこで、「べあ～」と「ペア（クマ）」をかけて、クマをかたどった手拭タオルを作ることになりました。現在は社会福祉協議会のサポートを受けながら、花山地区にある仮設住宅のお年寄りの生きがい作りになっています。また、1枚300円で販売しております、売り上げは「花山震災被災者の会」の運営に活用されます。神戸の皆さん想いや素晴らしい活動が栗原の皆さんにも伝わり、今、被災地の元気を支える素となっています。

レスキューストックヤード事務局長
浦野愛さんより

